

市民と市政をつなぎ議会傍聴も続ける

ウオッチング多摩

市民14万人全員がウォッチャーでありサポーター！

市議会改革などで、フロア巻き込み議論

26日市議選、立候補予定者9人が集まった

「大変よかった」の声、ウオッチング多摩の会の公開討論会

「ウオッチング多摩の会」はこんどこそ市民による市政改革ができる市議会議員選出を願い、立候補予定者の公開討論会を行いました。立候補予定者のうち9人が5日、パルテノン多摩の会議室に集まって市議会改革などを巡って論議を展開しました。参加されたのは中沢美穂、伊地智恭子、市川周、橋本由美子、小林憲一、岩永ひさか、向井かおり、遠藤めい子、大野まさき〔敬称略、クジ引き順による発言順〕の9氏で、このうち中沢、伊地智、市川の3氏が初めての立候補予定者。

多摩の桜が散り始めた日曜日。朝から雨もよいの肌寒い日だったにもかかわらず、討論会には9氏のほかに70人の市民参加があり会場もほぼ満席となりました。2時間半の論議の間、

途中で席を立つ人はほとんど見られず最後まで9氏の討論やフロアからの発言に耳を傾けられました。終了後のアンケートも「大変よかった」（アンケートの詳細は会のホームページ <http://watching-tama.com/>）の感想をいただけ、はじめての試みとしては有意義だったと会員一同選挙への関心の高まりを期待するところとなり、この熱い気持ちこそこれからのまちづくりの源泉と意を強くしました。

以下に討論会の模様を報告します。少々長いですが、明日のために是非完読されることをお願いします。

「ウオッチング多摩の会」

代表 神津幸夫

記録 半田拓司



1万人アンケートから始まった

会を主催したのは「ウォッチング多摩の会」(神津幸夫代表)。「多摩市議会ウォッチングの会」として17年前に発足して以来、市議会の傍聴、ニュースの発行などを通じて市民と市議会の距離を縮め、あるいは市民のためのよりよい市議会への改革を求めて活動してきた。この間、そのための大きなチャンスである市議選に際しては毎回、新市議へのアンケート(選挙後)や議員通信簿の発行(選挙前)など独自の角度から有権者市民に情報を提供、同時に市議選への関心を高めようとしてきた。

今回の立候補予定者による公開討論会は初めての試みだ。会はその前段階として去年の秋からいろんなことをやってきた。市民1万人を対象に多摩市議会の現状を中心的テーマにアンケートを行い、その結果を踏まえて11月にはフォーラム「よりよい市議会・議員選出を目指して」を開いた。今年になってからも、このフォーラムの成果をどのように次につなぎ、展開していくか、についてフォーラム参加者を含めての論議を行っている。

5日の討論会はこれらの活動の積み重ねに基づく。この日のために会は、全市議のほかに2月23日に市選管が開いた市議選の説明会に現れた立候補予定者全員に、討論会の趣旨と日時を案内し、同時に出欠の意思を聞いた。締め切りとした3月7日までに「出席」の返事をしてきたのが先の9氏である。

市民主導の改革を

討論会の司会・進行は「ウォッチング多摩の会」の神津幸夫代表。神津さんは議論を始める前に「市民による市政改革」のイメージとして「陳情・要求型から提案・解決型へ」という問題提起を行った。それによると行政・議会・市民という「市を動かす3つのエンジン」が、この変化する時代に対応し切れていない。行政は「入りが少なくなってきたのに歳入分配型のやり方が基本的に変わって」おらず、議会は「行政チェックはしているものの政策提案がなく、市民との距離が遠いまま」というのが現状だ。この2つのエンジンの状態を3つ目のエンジンたる市民が主導して改革していく必要がある、と神津さんは提起した。「これからは負の分配を市民がどう解決していくかという時代だ。そのことを市民が自覚して改革のために責任と権限を持っていく場づくりこそいま必要とされているんじゃないか」

安住の地だろうか

討論はまず自己紹介、同時に市議としての自分の政策を話すことから始まった。

発言者トップの中沢さんはいま30歳。自分が立候補することで「同世代の関心を呼ぶのではないか」という「興味喚起」をまず挙げた。行財政改革についても企業誘致や経済活性化についても語ったが、何よりも活動に「若い人たちを呼び込んでいきたい」と強調したのが特徴だった。次の伊地智さんは多摩市のオールドタウン化と少子高齢化率の高さについて話した。自らの政策に関連させて「バス停近くなのに3分の1も空き家がある」のはなぜなのか。また国の地域包括ケアシステムという政策に対して介護・医療をどうやっていくか、民間の活動家の声と意欲をどうつなげていくか、と関心を語った。

次は市川さん。豊ヶ丘に35年住んでいる人で、最初はベッドタウン志向だったのが最近「ここで安住の地として死んでいけるだろう

か」と思うようになった、という。ここを「安住の地」にするためのインフラを作り上げれば「若い人にとっても永住の地になっていく」。そういうニュータウン（NT）作りをやったらどうか、と市川さんは考える。「NT 住民は 45% が多摩市民で多摩市民の 7 割以上が NT 住民。多摩市が動けば NT は動く」と市川さんは声を大にした。

次いで現職の橋本さん、NT の貧困な若者層について語った。「非正規の社員でこういう場所（この討論会）にも来られない。彼らに寄り添うような政治を」。財源の問題については都政や国政とのつながりで捉え「国の金の集め方、使い方まで考えないといけない。そこにまで切り込んでいくような政治家のあり方が必要ではないか」。小林さんは 3 点指摘した。1 つは小学生の死亡事故が発生した新大栗橋交差点に完全な歩車分離信号を導入すること、2 つは公共施設再配置計画では住民との協議・合意を徹底させること、さらには国の政治にきちんと声を上げること、だった。

原点に立ち戻って

岩永さんは議員活動中「市民に役立つ議会づくりができていないか」といつも考えていたという。「議員が市民と向き合っていくことがますます必要になってきた」として議員になる前に 1 市民として参加した自治基本条例のワークショップの経験について話した。そこには市の若い職員も入って熱心な議論の場が成立していた。「いまこそその原点に立ち戻って政治を作り直していかなければいけないんじゃないか」。向井さんが語ったのは子どもの貧困と若者支援についてだった。生活困窮者自立支援法が成立したが、それほど多くの人が自分の暮らしを自立させていけない時代なんだと向井さんは捉え、中でも特に子どもと若者に視点を注いで活動してきたという。例えば「高校でつまずいた若者を支援する仕組みはない。子どもの頃から学ぶことへの支援、学び直しに力を入れ

ていくことが必要だ」

遠藤さんは高齢者問題と議会のあり方についてだった。高齢者問題では増えていく 75 歳以上に対するの取り組み、8 割以上いる「元気」な人たちの活躍する場を作ることの工夫、これから高齢期を迎える世代への意識喚起の 3 点を特に指摘。議会の問題は「市民の声を生かせる議会をどう作っていくのか」という点についての議員の多様な知恵を、と語った。最後に大野さんは前回選挙で「あれもこれも」ではなく「あれかこれか」の時代になると訴えたが、それがいま市政全体の共通の問題になってきた、と考える。「そういう厳しい時代の取捨選択を市民とともに情報を共有化してやっていく必要がある」と述べた。

議員同士が話し合えない!

ここから立候補予定者が答える時間になった。9 氏にはあらかじめ会からペーパーが配られ議会改革、公共施設、地域包括ケアシステムに関する質問が出されていた。それに対する 9 氏の答えだ。

最初のテーマは「**議会改革で何が一番大事か**」。去年秋にやった 1 万人アンケートでは「議員が役立っている」という回答は 3 割弱、「議員定数（26 人）は多い」は 8 割に及んだ。「市民は議会・議員を実に厳しい目で見ている。これをどう受け止めているか」と神津さんがツッコミを入れた。事前のペーパーでは「市民から必要とされる議会」とは何か、市民と議員との距離を縮めるにはどうしたらよいか、議員として何をやりたいか、などを訊ねている。

答えの中で、市議会の現状について何人かの現職議員が共通して触れたのは①行政から情報が出て来ない②議員同士の意見交換が難しい③市民との話し合いが大切だ、だった。

①については大野さんが「行政は 1 機関として私たちをとらえてきていないんじゃないか」という印象を持つ」と言ったほど情報が来ない

らしい。これについてこれから市議になろうとしている伊地智さんが「市民が主役、市民参加と言うが、そのためには情報の共有化がないと何も始まらない。議会ですら行政から情報をもたえられないようでは大変なことになる」

②では向井さんが8年間の実感として「議員同士の意見交換がなかなかできない」と嘆き「議会の中に話し合う風土をつくらなければ」と訴えた。誰でも首をひねりたくなるこの現状についても伊地智さんが「一般人の感覚としてびっくりした。議会というのはそういうところなのか」と反応を示していた。

③はまず遠藤さんが取り上げ「議会将個別要望型から政策提案型へと変えていくときに住民と議会がその場をどう作れるかが大切だ」と語った。その「場」はいま市長の方が先行して市民との対話の機会が多いが、議会には定着していないし議会報告会も有効に機能しているとは思えない、と遠藤さん。そして「もっとフランクに市民と意見交換をしていく場を作りたい」と言った。

これらの大野、向井、遠藤さんの発言を「ほんとにその通り」と受けた形で岩永さんが問題をさらに展開した。岩永さんが考えるのは、市長と市議会という2元代表制の中で「市長に負けない議会を作ろう」ということだ。そういう議会将市民と議論しつつ「1人1人の議員の強い意思で作っていく」。そのためには議員の「私があれをやった、これを言ったのは私だ、というようなパフォーマンスは自粛する必要がある」と岩永さんは主張した。「それこそが議会を変え強い議会を作っていくのではないか」

議会基本条例を使って

2010年に作った議会基本条例に関連させての論議も出た。遠藤さんは議会が「市民との意見交換の場を作ることの大切さは議会基本条例の中に芽が埋め込まれている」と言い、そういう場作りは「条例を実質化していくことだ」と説明した。小林さんによると、この条例は改

革を進めるための土台で、議論できる議会、市長をチェックできる議会、市民が参加できる議会、を3本柱にして始まった。改革も「少しは前に進んでいるんじゃないか」。3本柱のうち「市民参加」が特に大事だと考え「その前提として議論、審査、決定過程を市民に分かりやすくしなければダメだと痛感している」。橋本さんも「議会は悪い方向には進んでいない」という見方だった。3月の議会運営委で10数項目の申し送り事項を決めたが、改革にはそのような積み上げが大事で「そこで消さないで次へとつなげていくことだな、とつくづく感じた」

「議会基本条例がポイントだ」と市川さんも言った。「これを使わなくてはならない。意見交換会も条例に書いてある」。市川さんの考えでは議会に特別委員会を作り、全議員が各地の意見交換会に出掛けて話を聞き、その結果を特別委に報告する。「そういう形で意見交換会をきちんとやっていかないとダメだ」。伊地智さんは別の角度から、意見交換会も議会報告会も「自分の支持者だけを相手にしているようではダメだ。支持されていない人の前でも説明できなければ」。伊地智さんは若者の政治不信の1つに議員が「支持者の意見だけを代弁する」ことがあると考えている。

この問題、最後に発言した中沢さんは「こういうところに来ないような人にも分かるような発信の仕方があるんじゃないか」と若い世代独特の考え方を披露した。例えばヤフーの「みんなの政治」というようなサイトで4択で投票させたり、分かりやすく簡単な質問を投げかけるなどで情報を拾っていけば「市民の生の声が拾えるんじゃないか」

悩んで悩んで解決策を

第2テーマは「**公共施設の統廃合問題解決策はこれだ!**」。市はいま図書館、児童館などの地域施設統廃合の提案をしている。財政逼迫と修繕・維持費が膨らむのが理由だが、反対の声が強く進んでいない。神津さんはこのほかに数

年後に大規模修繕工事をやるパルテノン多摩も例に挙げた。工事規模は40数億円。「もちろん税金だ。しかし高齢者の中には2、3年経つとパルテノンより自分の身体の修繕が必要な人も出てくるんじゃないか」

この問題については特に現職議員の答えは歯切れが悪かった。第2テーマのコピーの中の「これだ!」に引っかけて「これだ、は思いつかない」(小林)「これだ、がないところに立たされている」(岩永)「これだ、はない」(向井、遠藤、中沢)という調子だった。表現の仕方にも共通性が見られ、小林さんが「市民、議会、行政が悩んで悩んで解決策を見つけるしかない」と言えば岩永さんは「解決策が出せないところで市民と一緒にどう悩んでいくか」、向井さんは「胸を痛めながら解決策を見出していくものではないか」

市長にやり直しさせる

もちろん「悩む」だけではない。小林さんは「その施設が利用者や地域と住民にとってどういう存在なのかを議論することが必要であり、決定に際しては合意を作ることが最後まで必要だ」。岩永さんは「どう悩むか」について自治基本条例を作ったときの話を再び持ち出して「市民、議会、行政が1つのテーブルを挟んで議論していくような場所を、この問題でもう1度作っていききたい」

こういう論議の中で市川さんの意見は明快だった。パルテノン多摩に関しては「民間を引っ張り込もう」という意見だ。民間数社に競争をさせて修繕工事の40億円を出させる。運営も使用料はその社に入るとしても所有権は持つ。地域の施設については「地域コミュニティの中の議論がない。これではダメだ。その議論をこれからのNT作りのためにも議会が中心になってやらなければ」

このほかに考えておくべき問題についての提起もあった。橋本さんは「市が建物の維持補修に予算をつけなかったツケが回ってきてい

る」という見方をし、向井さんは「必要だと考えている建物の機能は何か、将来必要になるかもしれない施設は何か、維持費の話より機能の話をしていかななくてはならない」。遠藤さんも同様に「残すかなくすかだけ考えるのではなく、これからの公共施設にはどういう機能や役割が必要かという観点からの議論が大切だ。その中から生まれてくる選択肢、可能性、将来のビジョンを共有することが大切だ」。中沢さんは「利用者が少ないのならなぜ少ないのかを考えて増やしていく努力が必要だ」と語り、大野さんは「今後どういう施設やサービスが必要かというビジョンが語られていないのが問題だ」と話した。

どうするか。決定的な知恵がない中で小林さんは「どこの自治体でも悩んでいる。財源の確保については国の大本の予算の配分の仕方を再検討させる必要もある」。橋本さんはパルテノン多摩について「突き詰めて考える必要があり、その上であるときには市民の投票によってでもどうするかを考えていかないと。小さなところの問題にもつながっていくから」と語り、岩永さんはズバツと「市長にやり直しをさせる」と言った。「私たちは正確な情報を与えられて議論しているのか。そこに立ち返って議論をしていけば結果は変わってくるのではないか」

「情報の透明化」については伊地智さんも強調した。「私たちに痛みを押し付けてくるのだからほんとに金がないのか、どこにも無駄はないのか。その問題がはっきりしたときには民間の力を入れたり市債発行ということも考えられる」

大介護時代がやってくる

第3テーマ「**地域包括ケアシステム構築には何が一番大事か**」。このシステムは政府の方針だ。高齢者が地域できちんと暮らしていけるように包括的な支援体制を作っていこう、ということだ。急速に進む多摩市の高齢化問題にはいまだどんな問題があるのか。それとの関係でこの

システムをどう考えたらいいいのか。神津さんは多摩市の特別養護老人ホーム（特養）老人保健施設（老健）の数を上げて「団塊の世代が 75 になる 10 年後、彼らはどこに行ったらいいのか」と論議を挑発した。

まず、このシステムの名前についての橋本さんの感想を紹介する。橋本さんは「この名前からイメージがわからない」と言う。こういう言葉が出てくると「危険信号ではないか」と感じる。「分かりにくさは医療や介護は自己負担でやりなさいという国の考えの裏返しではないか」などと勘ぐる気分にもなる。

市川さんにとってはこの問題が最大のテーマだ。いまに「大介護時代がやってくる」と言う。多摩市ではその最初の地域が諏訪、永山、貝取、豊ヶ丘、落合の 5 団地。ここの住民はいま 6 万人。10 年後には 85 歳以上が 6500 人で 75 歳以上が 1 万 7000 人になる。介護対象は数千人から一挙に 1 万人を超えるが、この地域にはそのための施設が「びっくりするほどない」。状況に対応できないと「介護砂漠」が発生する。どうするか。大規模なシステムを作ると市川さんは構想する。学校の跡地に「大胆なセンターを作って民間にやらせる」と市川さん。「この 4 月からやらないと間に合わなくなる」

「住まい」と「支える人」をどうするか

遠藤さんによるとこの国のシステムの中で重要なのは「住まいと支える人」をどうするか、だ。特養が足りないと言うが誰も特養が「終の棲家だとは思っていないのではないか」。国の言う在宅は可能なのか。「可能でなければどこに問題があるのか」。支える人材は条件が厳しく続かないという現実がある。「介護は人の暮らしを支える仕事だから何でもいいということにはならない」

遠藤さんが最初の発言で述べた「高齢者の 8 割以上が元気」について中沢さんがここで反応した。中沢さんはこの問題では「健康寿命を延ばすことが大事」と考える。老健や特養を回っ

たことがあるが「セカンドライフの充実している人が健康だ」と改めて実感したという。伊地智さんによると、この問題は先のテーマ 2 に関連する。元気な高齢者の生活を考えると施設が何らかの形でこの人たちが「積極的にかかわりたいこと」に応えられるかもしれない、と伊地智さんは考える。

遠藤さんの「支える人」については橋本さんが「介護福祉士の学校はいま定員割れになっている」と言う。「このままだと必要な時にケアする人が増えていかない」ことになる。橋本さんの見方では「医師から指導されないと動けない職業では誇りが持てないのではないか。モチベーションを変えないと介護をやる人の数は増えていかないのではないか」

言いつ放しはやめよう

国のこのシステムについては「考え方としてはいい」と小林さんが評価した。人生の最後を自分の希望する形で過ごす仕組みを「市民同士、行政や社会福祉法人、NPO などが協働してやっっていこうというのはいいいことだと思う」。しかし、医療や介護の施設不足、人員不足の中で、市長のようにこのシステムだけを強調すると「ほんとに介護を必要としている高齢者が施設からも追い出され在宅でも過ごすことが出来なくなる。そういう医療難民、介護難民が生まれるのが心配だ」

地域での連携も必要。伊地智さんはこのシステムだけではなくて地域で困っている人を孤立させないためにも民生委員や自治体を含めて「町全体で有機的なネットワーク作りが必要だ」と考える。地域だけではない。関係機関の間でもそうだ。向井さんによると、このシステムを機能させるためには市役所と社会福祉協議会の十分な連携が必要だし、市役所の中でも福祉の所管と住宅の担当の連携、医療と介護の問題も含めて「総合調整していく役目を果たすところとコーディネート機能がなくて進んでいかない」と向井さんは見る。

問題はいくつも出てくる。急速に進む高齢化を前に施設も支える人材も足りない。それらをどうしていくか。「議会として取り組んでいかなければならない」と岩永さんは言った。「公共施設でもこの問題でも共通しているのは議員も言いつ放しはやめようということだ。システムを機能させていくには地域のつながりや人のつながりが大事だと言う。言っているだけじゃダメ。これからは支持者だけではなく議会として市民と向き合う。高齢者の具体的な問題をまず議会全体として聞ける仕組みを地域の中に作り、システムをうまく機能させるような風土を作っていくことが必要だと思う」

フロアからの質問

討論会のプログラムでは最後の30分～40分をフロアからの質問の時間に充ててあった。フロアの参加者にはあらかじめ質問用紙を配っておき、寄せられた質問を大雑把に以下の3つに整理した。それに立候補予定者たちが手を挙げて答えてもらう。

<質問1>多摩NTの未来について.10年後にはどんな姿を考えているか。NT再生にはどんな取り組みが必要か。

<質問2>公共施設について。見直しプログラムに議員は関わっていないという印象がある。今後どうするか。一言で語ってほしい。

<質問3>議会改革について。政務活動費はどう使っているか、またどうあるべきか。議員定数は26人では多いという指摘がある.15人でもいいという声もあり、どう考えるか。

市長は古いテープレコーダー

この3つの質問をめぐっては<2>の公共施設の問題について論議がわいた。

まず立候補予定者側から岩永さんが手を挙げて発言、阿部市長批判を展開した。「NTは開発時と違って住んでいる人がいる。公共施設も利用している人がいる。市長はそれをどう受け止めているのか。問われているのは今後の問題

をみんなとどう共有していけるのか、だ。市長は市民と対話を、議会とは議論をしなくてはいけないと言っているが、あれは対話ではない。議会でも市長と議論した覚えはまったくない。私は彼とは自治基本条例作りも一緒にやり市民感覚を持った市長として最初は期待していたが、この段階で市長に期待できないのなら議会自体が強くなって市長と対抗していかなくてはならない」と言った。

ここで司会の神津さんが岩永さんに質問。公共施設の解決には「これしかない、と市長が行政プランを出してきている。ところが多摩市民は成熟し多様化している。議会がこの際、市長案に対案を出したらどうか」

フロアから手が上がった。豊ヶ丘からの参加者だ。計画の中身については「外部へ委託調査の問題でもある」と言った。「それが行政計画的な整理になっている」からだ。「そのこと自体のチェックを議会が入れているとは思えない」とフロアの発言は議会について問題を提起した。市長についても「住民説明会は3回。しかしこれで住民に周知したとか情報を共有したと言っているのはナンセンス極まりない。市長は4回出掛けてきて対話集会をやったが、これは対話ではない。使い古したテープレコーダーを聞かされたただけだ。まるで対話と協議の実質を備えていない。市民が主人公と言ってきたこの市長については、議会はどうか批判しているのか。議会がチェック機能と政策立案機能をフルに活用して市政の改善と発展を図らなければ、何も変わらないんじゃないか」

次に遠藤さんが手を挙げ、行政計画と議会との関係について「行政計画を議会が議決という形で関与するようにはなっていない」と現状を説明した。<2>の質問に「議会が関わっていない印象」とあるのは、その通りの面がある、と遠藤さん。先のフロアからの発言は「その仕組みをどうしていくかということではないか。行政計画に議会が関与できる仕組みを今後考

えていかななくてはならないだろう」として特別委員会を立ち上げるやり方などを具体的に話した。

若い人を呼び込みたい

<質問1>にはまず市川さんが答えた。「私たちは30~40年この市民をやっている。その自覚と誇りと度胸で新しい人を引っ張り込み、この土地と文化を使いながら住んでもらう。一方で私たちがゆっくり死んでいく「安住の地」になるような、その両面をやる。そのためにはかなり思い切った投資をする。尾根幹線は賛成。多摩市は鉄道の駅が4つある。それをうまく使って人を引っ張り込む必要がある」

続いて橋本さん。「これからの10年でNTは大きく変わるし変えようとしている。NT再生会議で出てきた案は諏訪や永山の住民が誰も知らないうちに高層化やコンパクトシティの多摩版が出ていた。これに対してはみんなで案を作るのが必要だし市民レベルで声を出せるようにすることが大事だ。また、ここに住み続けたい人もいるだろうがもっと分散して暮らしたい人もいるだろう。私は多摩市に人口を増やして幸せにするというより分散しても幸せになる道を考えたい」

中沢さん。「若い人を呼び込みたい。学生時代に過ごした町には思いが残る。空き家を安い家賃で学生に貸すと、そういう人がやがて多摩市に住んで子育てをして、という連鎖ができるかもしれない。IT化によって都心じゃなく近い場所で働けば趣味の時間も多く持てる。若い人が重要なのだ」

投票率が低すぎる

<質問3>定数については市川さんが発言した。「多摩市議会は無所属新人が議員になるのは極めて難しいところだ。投票率が低すぎる。政党の組織票が勝ち議会は政党の管理になっちゃう。投票率がもっと上がればいいが、今のままだと定数を減らせという声は無所属新人の首を絞めるようなものだ」

政務活動費は小林さんが答えた。小林さんの会派では議員団ニュースの制作費、年間を通しての学習会の参加費用が主な使途。多摩市議会では使い道が決まっており厳しくチェックを受ける。領収書も必要で「度外れた使い方はない」。小林さんは定数についても意見を言った。定数は現在、上限を決めてそれ以下にすることとなっている。今の定数より減らすと無所属や障害者が当選しにくくなる、と小林さんは言った。

入 会 申 込 書	■会費・カンパ振込先■ みずほ銀行多摩センター支店 1197246 「多摩市議会ウォッチングの会」
氏名 _____	■申し込み■
住所 _____	「ウォッチング多摩」の会 代表 神津幸夫
電話・FAX _____	〒206-0034 多摩市鶴牧 3-14-2-102
メールアドレス _____	042-372-9496
	HP: http://watching-tama.com/

★入会金は必要ありませんが、会報発行等の活動維持のために年会費 2000 円を頂いております。